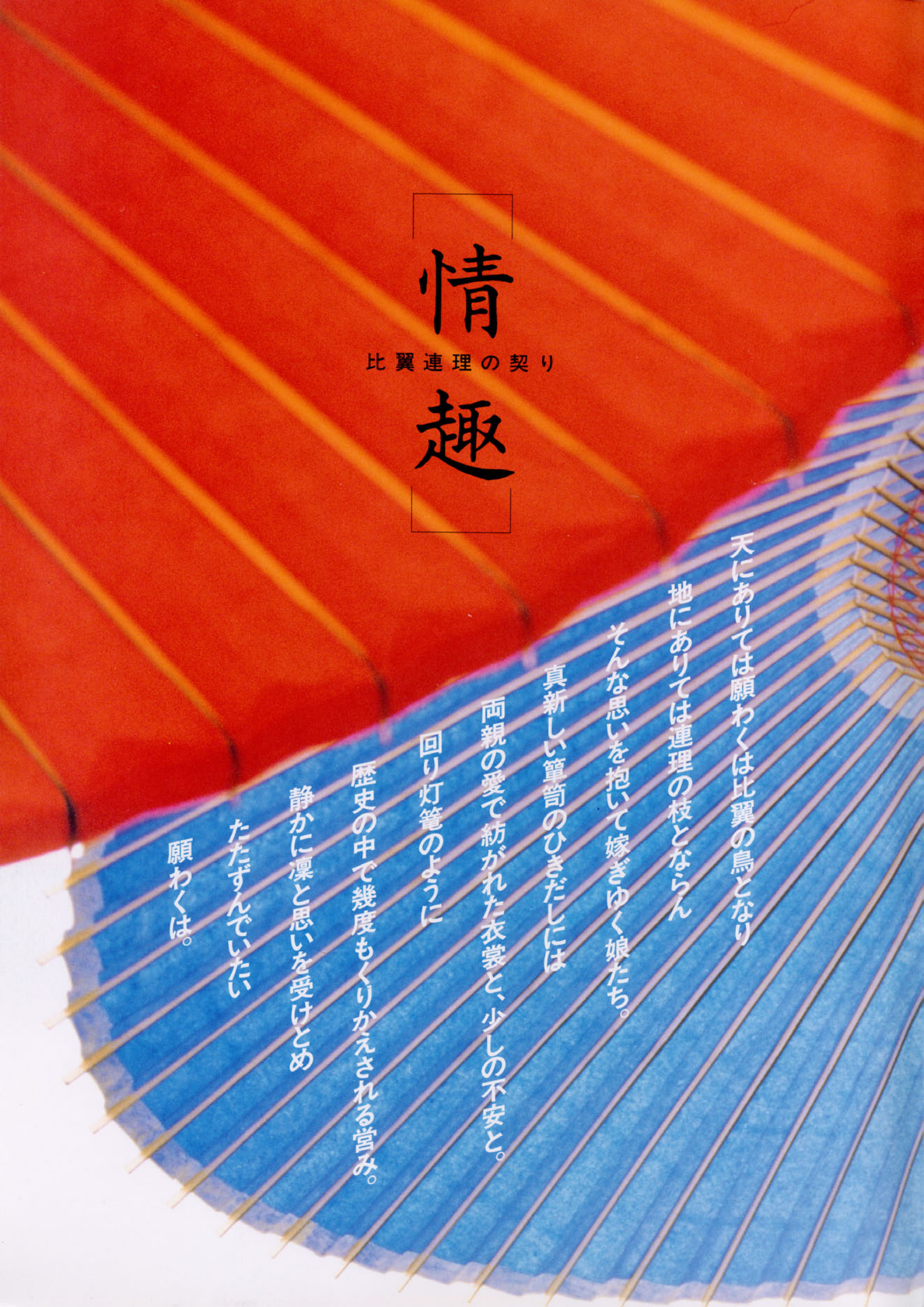


桐の華

古雅の余韻



情

比翼連理の契り

趣

天にありては願わくは比翼の鳥となり

地にありては連理の枝とならん

そんな思いを抱いて嫁ぎゆく娘たち。

真新しい簞笥のひきだしには

両親の愛で紡がれた衣裳と、少しの不安と。

回り灯籠のように

歴史の中で幾度もくりかえされる営み。

静かに凜と思いを受けとめ

たたずんでいた

願わくは。

娘の祝いに桐三本、は往古のよき習い

ぐんぐんと力強く空をめざす桐に

愛し子の健やかな未来を重ねた。



二十年の歳月を経て

桐は嫁入り道具となり再び新しい歩み始める

かさねられた深い愛着とともに。

興 趣

千歳百歳のなごみ

平安の昔

高貴な色とされた紫の花が愛され

貴族の屋敷や宮廷の庭に

好んで植えられた桐。

源氏物語の中でも

多くのエピソードを彩っている。

明治時代には美しい葉の形が

皇室の紋章にもなった。

桐がもつ木肌のやさしさは

重ねられた、時のぬくもりだろうか。



全国一を誇る、加茂桐箆笛生産の歴史は200年余り。その発祥は江戸時代、天明年間(1781～1789)と伝えられます。加茂の気候は桐材の渋抜きや乾燥に適しており、当時の加茂川は箆笛や桐箱などを積んだ船でにぎわいました。明治30年、伝統技術の保存と普及を目指して、加茂箆笛組合が発足。現在の加茂箆笛協同組合にその精神は受け継がれています。昭和24年には国から重要木工集団地に指定され、新潟の地場産業としてのポジションを確立しました。以降、見本市の開催や工業団地の造成、桐原木の共同仕入れ、桐苗木の植栽奨励など意欲的かつ着実に振興策が進められ、昭和51年、通産大臣より伝統的工芸品に指定されました。箆笛に貼られた「伝統マーク」の証紙は、いわば優れた品質と伝統の職人芸の証です。

詩

深遠な心入れ

趣

衣はこころ

色の襲に言葉を託し

四季折々の絵物語を一枚の布に織りなした

日本の美意識。

繭から紡がれた一本の絹糸が
気の遠くなるような工程を経て
その一つ一つの想いが重ねられる。

こころを仕舞う容れものも
おなじ意識につらぬかれている。



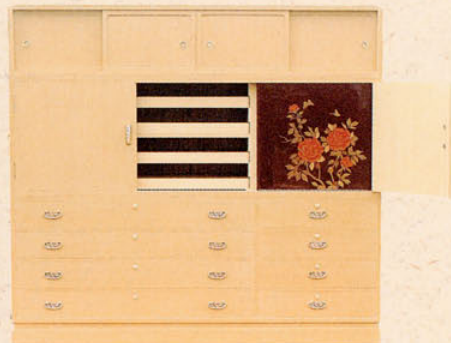
秋の千草にまじり
 鮮やかな紫を見えかくれさせる
 桔梗の凜とした美しさは
 七草の中でもひとときわ目をひく。
 清楚で繊細なその姿は
 もののあわれを感じさせ
 古くから衣裳、道具、
 陶磁器などの文様に
 好んで用いられている。



桔梗

高さ1,757×巾1,700×奥行500(mm)

言
ほまれ



天
すえひろ



和たんす ◆ 高さ1,721×巾1,182×奥行455(mm)

昇たんす ◆ 高さ1,721×巾1,182×奥行455(mm)



御所

7



その年の雪の深さ

日差しの強さ、土の種類

桐はそれぞれが育った環境で

木目や色調がまったく異なる。

様々な個性が

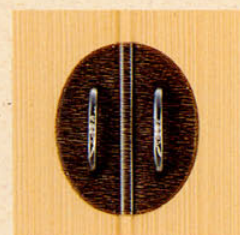
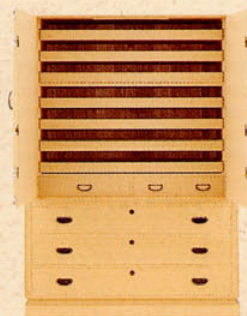
匠の峻厳な目と手を経て

美しい調和に生まれ変わっていく様は

感動すら覚える。

連

さざなみ



差

さざなみ





馥郁たる香りで秋をつげる菊は

日本人にとってなくては適わぬ花のひとつ。

古く中国では

菊酒は長寿の靈酒とされたことから

「不老長寿の花」「延年草」「寿客」

などと称される。

観菊の宴や菊合わせ、菊の着せ綿など

重陽の節句には

風雅な時代を伝える行事が行われた。



松葉





訪れた春への

人々の喜びが結晶したような

絢爛たる花、桜。

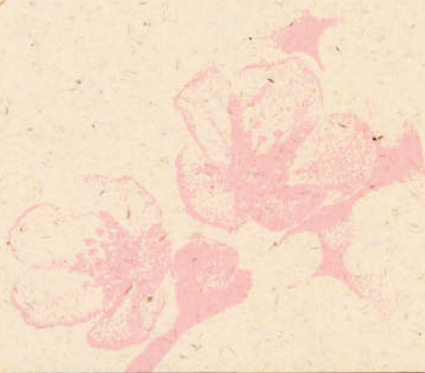
ほのかに紅をさすつばみ

遠く霞む万朶の花

舞い散る花びら

これほどまでに愛された花は他にはない。

桜は心であり文化である。



桜
さくら





扇
おうぎ

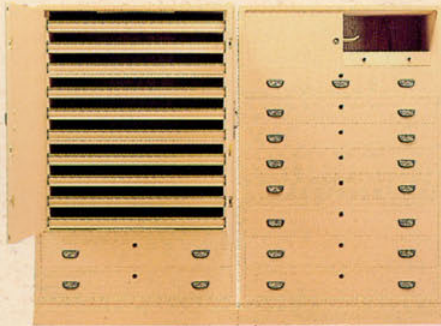


11

十連
あこがれ



舞
まい



桐は簞笥となつても生きてゐる。
季節の動きを敏感に感じとつて
湿り気を受けつけず
中の温度は一定に保つ。
手をかけて使い込んでいくことに
ますます心をかけたくなってくる。

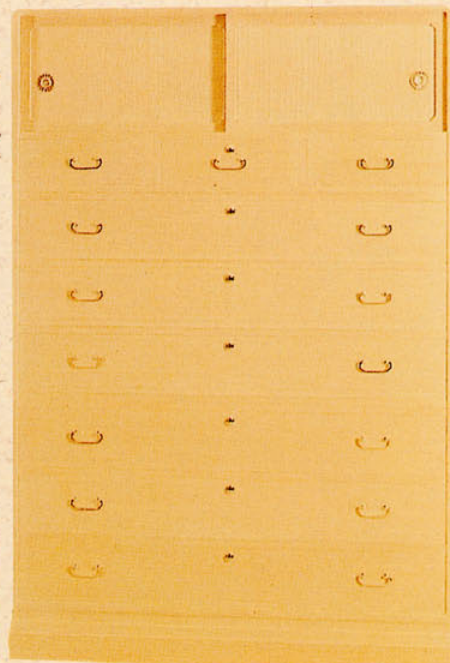
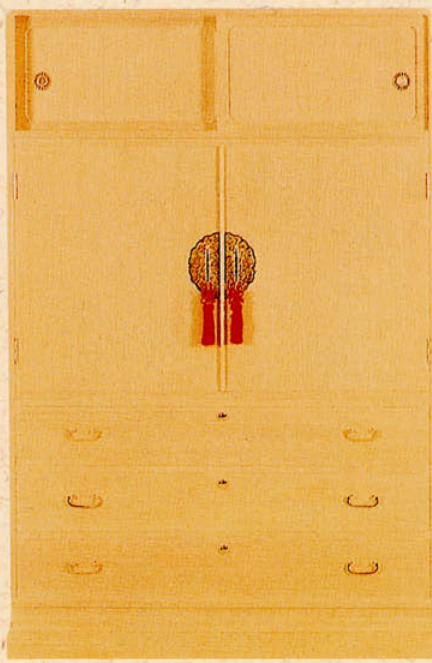
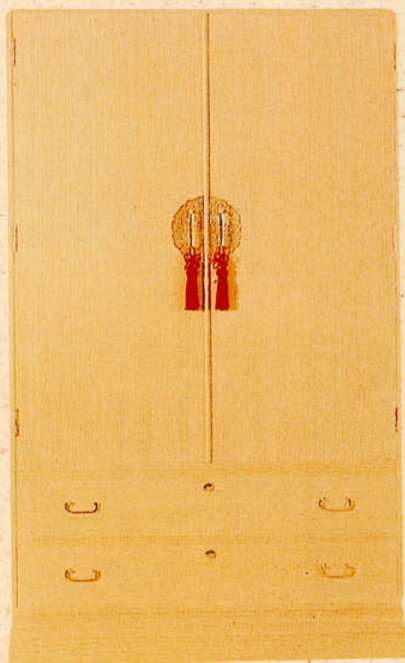


美焼 びしょう



高取 たかとり







葵は夏を思わせる。
 真っ青な空に向かって
 スツと花穂を伸ばす凜とした姿は
 桐の清しさと
 どこか似ている。
 果実からとれる香料は
 石鹼、リキュールなどに
 という実用的な一面もある。



華月
 かけつ



蘭 らん



16

千草 ちぐさ





和
たんす



都
みやこ



山笑い、
野山にわかには春めく。
加茂山公園では
5万本の雪椿がたおやかに咲く。
野鳥のさえずりと桜並木が
うらかな春を
満喫させてくれる。

水しぶきをあげて
鯉や鴨を追いたてる子供たち。
鮮やかな花々で埋められた河川敷からは
祭り囃しも聞こえてくる。
栗ヶ岳は日差しをいっぱいにあびて
日々緑の濃さを増している。

風

清しき風情

趣

川の流れるまちはやさしい。
水はとどまることなくはらはらと表情を変え
人々はそこに四季の移ろいを知る。
あさがおが朝日につぼみを解くときのように、
静かに、しかしくっきりと。
おと、すがた、いろ、におい
おだやかなこの土地の人々にかわって
風土を育んだ大いなる自然が雄弁に語りかけてくる。

三方を山に囲まれたこの街の雪は
しんと降る。
冬鳥越では家族連れが
思い思いのシュプールを描く。
春のきざしが見えるまで
人々は長い長い
冬ごもりにはいる。

空はあくまで高く
大気は澄みわたる。
水源地の紅葉は水面を燃え立たせ
まもなく訪れる冬を待つ。
街のそこそこにある古刹では
苔に降りる霜が美しい。

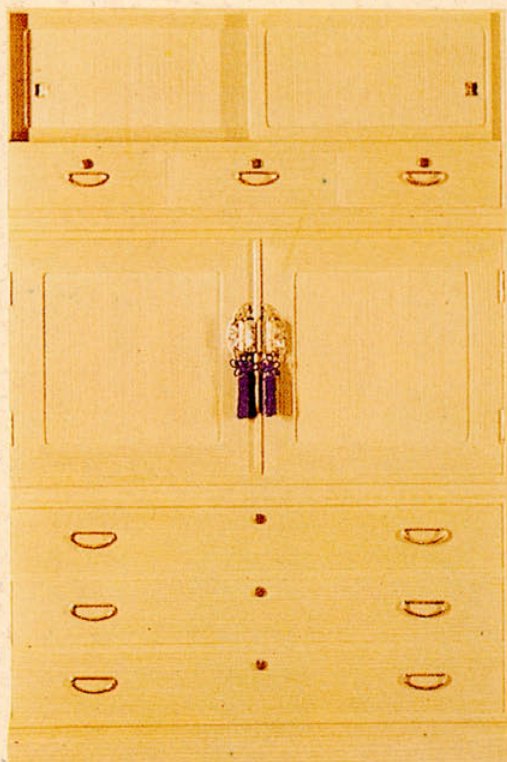


雅

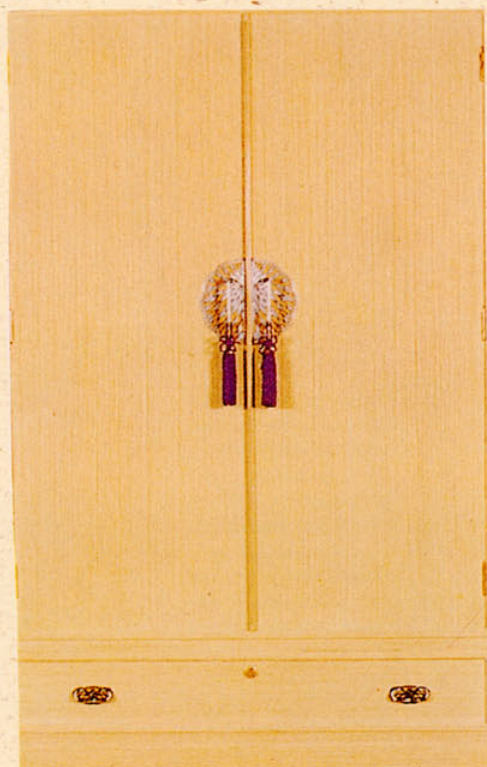
香 り た つ 風 雅

趣

この季節だからこの帯を締めたいと思いついて
その帯に似合うきもの、それから長襦袢
次に半衿をあわせて、帯あげ、帯じめ……
結局一日がかりで、また簞笥にもどす羽目に。
毎日着た時代ならありえないこんなことも
現代の女性にとっては、楽しく豊かな時間。
新しい時代にもまた新たな趣をみせる桐簞笥は
心の栄養も愛蔵してあるのだろうか。

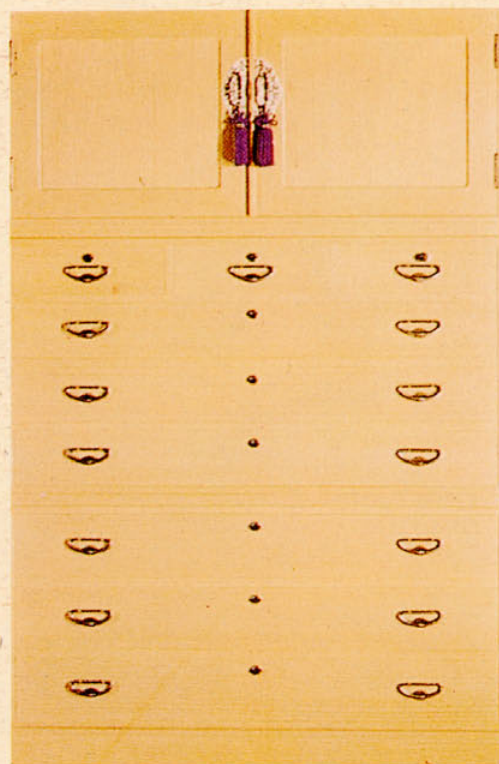


中開下三

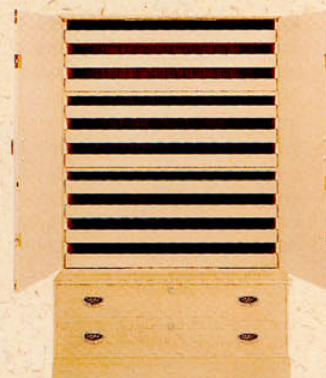


大開下一

精神を残し
かたちを変えていくのは
悪いことではない。
柔軟性が守った
日本の古きよき伝統も少なくない。
桐簞笥もまた
暮らしの歩調にあわせて
これからも
変わり続けていくことだろう。



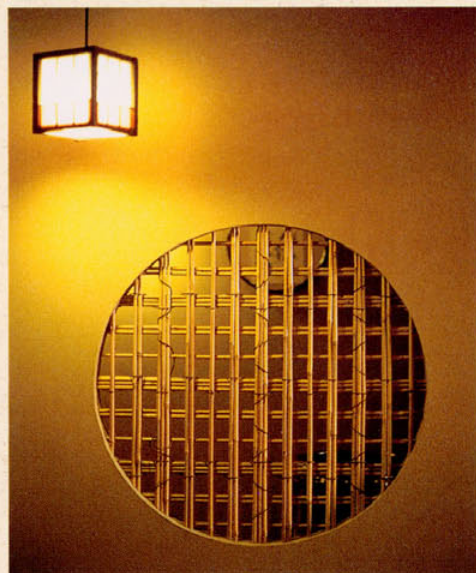
九ッ口上開



大開下二



今新しいと思うスタイルも
次の世代にはレトロと思われるのだろうか。
ひとつ確かなのは
その頃もこの美しさと品質はかわらない
ということだ。





野

あたたかな鄙び

趣

和がこちいいのは、
日本人が自然の懷で生きてきたから。
自然を相容れないものでなく本来一体のものとする考え方。
桐の杢目の美しさなども
自然があたえてくれたものを素朴にとりいれたにすぎない。
しかも結果は人の手が加わることで
一層洗練された形で人間の生活の場に象徴され、現れる。
ここには日本人独特の、自然との関係が示され
それぞれが深い愛情で結ばれている。



木目はその木の歴史だ。
ひとつとして同じものがない個性でもある。
そこに触れると
うつそうとした森林や鳥や虫
そんな木の記憶を共有したようで
崇高な気持ちになる。







二百年ものあいだ受け継がれ
 研ぎ澄まされた技には
 深遠な愛情と慈しみが満ちている。
 それを手にできる幸せを
 心からかみしめたい。





妙

たえなる手練

趣

28

木は切ったあとも生きている。
雨の日は雨の日の呼吸をするから
鋸一枚分の精度で調整をする。
本当にその人が欲しがっているものをつくるには
その相手に会わなくてはいけないという。
使い込んでいく人の性質や人柄までも
計算に入れてはじめて「職人の仕事」が完結する。
桐簞笥がかぎりなく芸術に近く
決して芸術ではない理由がここにある。

製造工程

造材

1

加茂の桐箆筒は他の産地と違い、原木を製材する所から一貫作業で行ないます。伐採後、約3年間の天然乾燥を行ない、これによって桐材の渋抜きがされ製品に変色や狂いが生じません。



木取り

2

各部材は適材適所に選別され、経験を積んだ職人が、木目合せと色に気を配りながら同質の材をより分け組み合せていきます。



組立て

3

加茂の桐箆筒は、木釘を打ち込む独特な伝統技法で堅牢に組み立てられます。引き出しや扉はかんなどで調整しながら、すき間なく本体に入れ込みます。

塗装

4

木地を調整してから字づくりかけをし、柾目を立てます。その上に砥の粉と夜叉の実の混合液で何回か刷毛塗りします。自然乾燥した後、木目に沿って蠟を均一にかけ、磨きます。

金具付け

5

桐箆筒の表情は金具のデザインで大きく変わります。ペテランの職人の手で慎重に、引き手金具、蝶番、錠前が取り付けられ、箆筒が完成します。

桐たんすの手入れ方法

- ① 通気性のよい場所に置いて下さい。
- ② 濡れたり、汚れた手での使用をさけて下さい。
- ③ 汚れたらみだりにぬぐい取らないで下さい。
- ④ とびらは両手にて開閉下さい。
- ⑤ 引出しの出し入れは両手にて静かに行ってください。
- ⑥ ほこりがついたら乾いたやわらかい布で軽くふき取って下さい。
- ⑦ 置場所の水平を御確認下さい。
- ⑧ ご不明な点は製造元にお問い合わせ下さい。

桐の特長は、木肌が柔らかで、衣類の保存にすぐれているというだけではありません。桐は日本産の樹の中でいちばん成長が早いため、女の子が生まれてから苗木を植えても、嫁入りまでには箆筒がつくれるほど立派に成長してくれます。つまり、伐採したのもいち早く緑で潤してくれるのです。しかも生命力に富み、寒冷地の方がよい桐が育ちます。桐は地球環境を守る上でも、すぐれた資源といえるのです。

会社概要

商 号 株式会社 高橋新吾タンス店

営業種目 1. 総桐タンスの製造および販売
2. 家具。室内造作の設計、施工及び製造販売
3. 木材の販売
4. 前各号に関連する業務、および其他の事業

創 業 年 大正8年

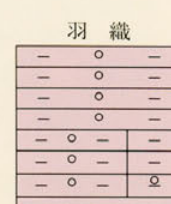
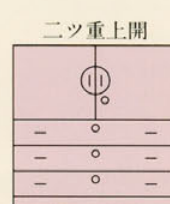
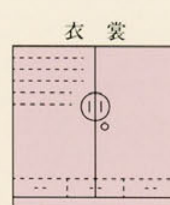
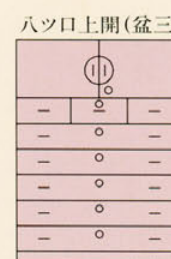
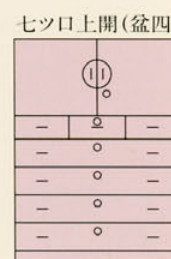
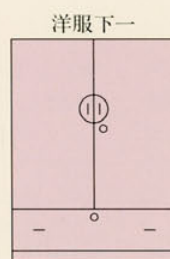
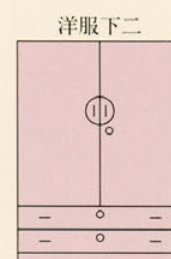
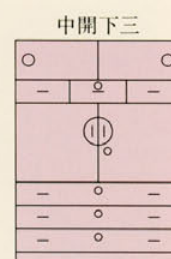
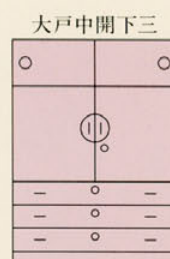
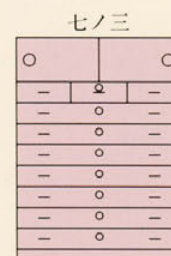
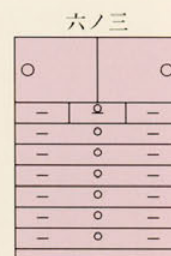
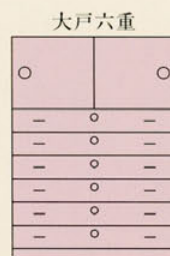
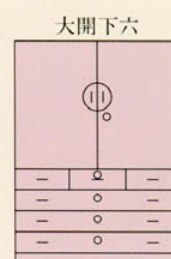
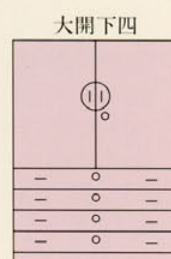
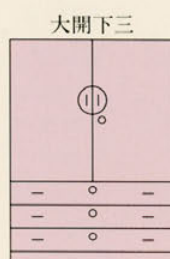
資 本 金 1,000万円

所 在 地 本 社 新潟県加茂市本町1-33
TEL.代表0256-52-0325 FAX.0256-53-2308

工 場 新潟県三条市上保内字砂押
(卸部) TEL.0256-38-8217 FAX.0256-38-2459

桐箆笥の標準型名称一覧

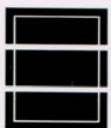
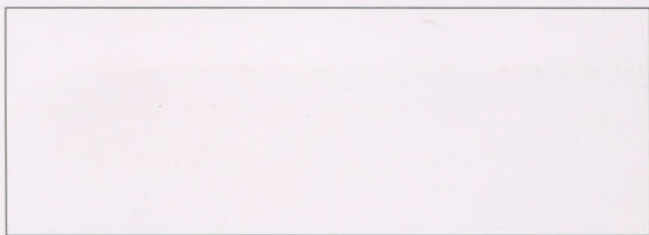
特別オーダーメイドを受け承りますので、
下記の図面・名称を参考に、
ご遠慮なくお申し付け下さい。



「PL賠償制度付共済」について

(社)全国家具工業連合会
☎ 03-3533-9568

桐箆笥およびその他家具類の製造には万全を期しておりますが、万一弊社の製造物に欠陥があり、それが原因でお客様の身体や財産に損害が生じた場合、損害賠償金などをお支払いするための「PL賠償制度付共済」に加入しております。



株式
会社



総桐タンス・民芸家具・特注家具製造

高橋新吾タンス店

本社・ショールーム/〒959-13 新潟県加茂市本町1-33 電話0256(52)0325 FAX0256(53)2308
工場・配送センター/〒956 新潟県三泉市大字上保内字砂押 電話0256(38)8217 FAX0256(38)2459

